

## 創業100周年記念第5回公開講座が開催されました

10月18日(土) ホテルブエナビスタにおいて、「脳卒中とそのリハビリテーション」をテーマに100周年記念第5回公開講座が開催されました。約270名の参加者にお集まりいただき、盛大な講演会となりました。

衆議院議員の中山太郎先生には、「脳卒中、家族の立場、政治の課題」と題して、奥様が脳卒中になられた時から現在に至るまでの経験談を交えながら、日本の救急医療体制、急性期リハから慢性期リハの問題について触れ、現在「脳卒中を考える議員の会」を設立し「脳卒中对策基本法」制定にご尽力されていることなどについてお話いただきました。



兵庫医科大学の道免和久教授には、「C I療法、脳卒中慢性期の回復の可能性」と題してC I療法について動画での映像を用いて一般の聴講者にも分かりやすいお話をしていただきました。脳卒中慢性期においてもあきらめることなく積極的なリハを継続することで麻痺を回復させ、ADLのみならず患者のQOLを高めることにつながっていると講演され、最後に多田富雄東大名誉教授のお言葉を引用して「命綱としてのリハ」「患者の

生き甲斐と生活の視点に立つリハ」について熱く語られ、会場は大きな拍手に包まれました。

患者さんのご家族である栗林正好様からは、脳出血で倒れたお母様の5年間にわたる回復の経過を映像を交えながらリアリティにあふれたプレゼンテーションをしていただきました。ご家族としてのご自身の経験から、「急性期以降はずっと回復期であり、維持期は存在しない、そのためには回復を支えてくれる主治医とリハスタッフが必要」との言葉が印象的でした。



そして総合リハビリテーションセンター原センター長からは「リハビリテーション～新たなステージへ」と題して総括していただきました。これまで脳卒中維持期と称されてきた慢性期は「地域生活期」「生活応用期」または「復職目標期」として患者も医療者も目標ある、あきらめないリハを継続していくことが重要であるとお話しされ、公開講座の最後をしめくりました。